

みはらしの里古民家の移築について

国営常陸海浜公園事務所 工務課 建築設備係長 浅海 宏匡

1. みはらしの里について

国営ひたち海浜公園「みはらしの里」は、「なつかしい村の風景と活動」をテーマに、江戸時代から昭和にかけての農村風景を再現しています。前面に広がる畑、背景となる雑木林と一体となった農村風景の中で、四季折々の暮らしの歳時記を展開することによって、なつかしいふるさとの暮らしを継承していくエリアであり、その中心施設として茨城県内に残されていた個性ある古民家を移築・整備しています。令和元年7月に3棟目の古民家の「奥の屋」(以下、旧會澤家住宅)を供用しており、その整備において工夫した点について紹介します。

みはらしの里の整備 整備テーマ：なつかしい村の風景と活動 (なつかしい風景、なつかしい生活のある村づくり) 関東地方平野部の江戸期から昭和にかけての農村風景を再現 古民家の整備 (なつかしい村の風景) 年代によって変遷していく古民家の形態、徐々に発展していく、村づくりの様子やその変遷 地域の伝統的な建造物を保存・活用 (なつかしい村の活動) イベント活動やプログラム(常陸の伝統行事・昔語りなど) 風習や行事などの文化的資源を保存・継承	 みはらしの里 配置図
---	---

2. 旧會澤家住宅について

旧會澤家住宅は、3期にわたってつくられました。第1期は「オクザシキ」と「ナカノマ」の二間で、現在の茨城県常陸大宮市に山伏の家として建てられたと言われています。第2期には、1700年代半ば頃に現在の茨城県那珂市に移築増築され、医業が営まれていたと言われています。第3期には、土間部分が増築され現在の姿になり、民家としては特徴的な形となりました。

「オクザシキ」には床の間や棚、付け書院が整っており、梁などの材料が細く、数寄屋的な印象があります。この家は、上記の他、幕末の「天狗諸生の乱」の関わりがあるといわれる刀傷や槍の痕等があり、地域の歴史との物語性がある民家です。

第1期 山伏の家、建築 第2期 移築して、増築 第3期 土間部の増築	 旧會澤家住宅 平面図	 ▲正面写真	 ▲オクザシキ 床の間・棚	
		 ▲ジュウニジョウ柱 刀傷	 ▲床柱 刀傷	 ▲オクザシキ天井 槍の痕

3. 整備において工夫した点

1) 伝統的な工法を用いた整備

古民家の年月を経た古い材が貴重であるため、最大限活かすこととしており、傷んだ部分を繕う「埋め木」、「矧ぎ木」、「根継ぎ」などの伝統的な工法を用いて丹念に繕い、再利用しています。

また、柱の足元は伝統的な工法である「光付け」を行っています。「光付け」とは、柱の底を基礎石にあわせて削るもので、自然石の表面の凸凹にぴったりと合うまで職

人が何度も削るため大変手間暇がかかる高度な作業ですが、各柱において再現しています。

なお、繕ったところは、もとの材との違和感がないようにするため、ブラシで削って木目を浮き出すなど、表面を荒らす「風蝕仕上げ」をした上、「古色仕上げ」で色合いを合わせています。

2) 建物の良さをみせる工夫

移築前は、ジュウニジョウ、チャノマ、ヘヤには天井がありました。建物が立ち上がるにつれ、小屋組み（屋根の骨組み）が特徴的であることがわかり、有識者と検討の上、小屋組を見せるため天井をとりやめました。



伝統的な工法を用いた整備



▲ジュウニジョウからドマ方面

また、チャノマやヘヤには、独立した居室の設えとして小壁や建具がありました。これらがない方が全体の空間がわかりやすいため、小壁や建具をとりやめました。



▲ドマからジュウニジョウ方面